

可能性の時代

世の中には不思議なことがあるもので、絶対に駄目だと思っていた大学に合格してしまいました！

皆さんからどう見えるか分かりませんが、私は、夢を描いても、思うばかりで努力をせず、描いた夢を途中で投げ出すクセのある人間なのです。

実は今回もそのクセは健在で、受験の申し込みをしたまでは良かったのですが、自分でやろうと思ったほどの努力をしなかった為、受験日が近づいて来ると、「たとえ合格しても、実際に行ける訳でもないし、受験に行くだけ、時間とお金の無駄じゃないか」という、結果を見ないための「正しい理由」が浮かんで来るのです。

特に今回は、受験日が雨の降る、とても寒い日で、私が「行きたくないなぁ」と思っている横で、妻が「行くのやめたら」と悪魔のように優しくささやいたのです。社員さんや子供達に「受験する」と言っていなかったら、またやめてしまっていたかも知れません。

受験会場に着くと、たくさんの受験者がいて、その人達が皆、利口そうに見えるのです。

帰りたい気持ちのまま、仕方なく苦手な筆記試験を終え、せめて期待の出来る「面接」に臨んだのですが、そこでいきなり英語の文章を渡され「これを訳して下さい」と言われた時には、本当に「すみませんでした」と言って帰ろうかと思いました。

私の場合、受験者数が多かったことが幸いして、誰かと間違えて合格したのですが、今回痛感したのは、「人生はわからない」「最後までやり切ること」の大切さでした。

私は、色々な相談にのっていて、「負けグセ」というものを感じることがあります。

一口に「負けグセ」と言うと、「よく負けるクセ」だと思う方がいるかもしれませんが、「負けグセ」とは、途中で逃げたり、最初から夢を描かず、勝負しない生き方のことで、言い換えると「絶対に負けないクセ」だと思うのです。

私も「失敗」は好きではありませんが、「失敗」は、挑戦した人にだけ与えられる「ご褒美(情報)」なのです。

私は、今の時代は、求めさえすれば、誰にでもチャンスが与えられる素晴らしい時代だと思っています。どんな家庭に生まれ、どんな生い立ちをしても、正しい求め方をすれば、可能性の扉は現れるということと、たくさん失敗と共に示していければ、私にとってもう良い人生になると思うのです。

私の場合、もし高校から、親のお金で大学に行ったら、絶対に勉強しなかったと思います。今、この不況の中、自分で努力し、社員さんや、家族の応援で行くからこそ、大切に出来ると思うのです。

仕事もあって、時間的にも、金銭的にも、学力的にも、どこまでやれるか分かりませんが、少なくとも「社会人を入れて良かった」と言ってもらえるように、姿勢を正して講義を聴くなど、「社会人」としての役割を果たして来たいと思っています。

お礼とお詫び

先月号で「娘の結婚」を発表したところ、本当に多くの方から、お祝いや祝福のお便りをいただいております。

娘夫婦にも見せ、とても喜んでもらっていますが、あまりにも多かった上、大学入学までに仕事を片付けなくてはならない事情のため、皆さんに、ほとんどお返事を書いていないのが現状です。本当にすみません。

まさか私の娘の結婚に、こんなにも多くの方から祝福いただけるとは夢にも思ってもいませんでした。東京に行ったら少しずつ書いていきたいと思っていますので待っていて下さい。

貧乏生活

私は子供の頃、貧乏でしだし、勉強も苦手で、自分のことが好きではありませんでした。でも、そんな私でも、心の中ではずっと人に好かれ、幸せになることを求め続けていました。

しかし、子供の私には、どうしたら人に好かれ、幸せになれるのかがわからず、世間を見渡すと、肩書のある人やお金持ちの人が人から大切にされ、幸せそうに見えたのです。

そこで私でも、成功して、お金持ちになれば、幸せになれると思い、私なりに今日までやってきたつもりです。

お金が来ると、それまではお財布の中身を見て、メニューを決めていたのが、「何を食いたいかな」で決められるようになり、エアコンが付いた時などは、カラーテレビが来た時と同じ位の感動がありました。そうして一つ一つ、色々なものが揃っていくに連れて、一つずつ幸せになっていく気がしました。

しかし、いつの頃からか思い始めたのです。

お金があって、高いお酒を、好きなだけ飲むことより、妻が出産でいなかった時に、いつもより一本余計に飲んだ、あの安いお酒の方が贅沢で、幸せだったと。

お金や肩書というものは、水泳の「浮輪」のようなもので、確かに安心や快適は与えてくれるけれど、それに捕まっている限り、本当の水の醍醐味(リアリティ)は味わえないのかも知れません。

私は、4月から新築した家を離れて、東京で一カ月、32,000円のアパートに住み、10万円(アパート代、食費、光熱費、銭湯代、小遣い)の生活を始めます。昔と同じような貧乏生活に戻るのに、幸せを感じられるのは何故なのでしょう？

あの頃、貧しかったことが不幸だったのではなく、自分のことが好きでなかったことが不幸だったのかも知れません。

さよならの季節

息子が私と走っていることを、学校の作文に書いてくれました。

「お父さんと走ってる」 杉井崇人
 お父さんと僕とで走ることに変わった。僕は嫌だったけど走った。
 途中から苦しくて走れないのに走らされた。やっとな小川港に着いたと思ったら、すぐまた走った。
 一緒に走っていて「何でお父さんは同じペースで走れるのだろう？」と思った。いつもは仕事をしているけど、走るときには別人になってしまう。
 お父さんに「何で同じペースで走れるの？」と聞いたら、お父さんは「いつも走っているからだよ」と言った。
 帰りは、ヘトヘトだった。お腹が痛くて、めまいがしてきて、もう倒れてもおかしくなくなった。
 そして、家に近づいたその瞬間、転んだ。
 お父さんは気づかないで行ってしまっただけで、僕はまた走った。家に着いてから見たら、ひざをすっぺっていた。

この作文によると、子供は、私が転んだことに気づけなかったと思ったようですが、私は子供が転んだことに気が付いていました。

でも、ここで駆け寄ったら、息子がくじけてしまうような気がしたので、可愛想に思いながらも、わざと走り続けたのです。

この数カ月間、子供と一緒に走って来て、何度かベソをかきながら、一生懸命に走っている姿を見ました。それがいじらしく、本当に幸せになってほしいと思わずにいられません。

私が東京に行ってしまうので、一緒に走るのも、あとわずかとなりました。少し寂しい気もしますが、終わりがあから、更に大切なものになるのだと思います。「さよなら」を大切にしたいです。